

## 『離縁予定の冷血公爵様、なぜか私をベッドから逃がしてくれません～薬師令嬢は夜の解毒も命じられています～』体験版

重々しい馬車の車輪の音が、夜の闇に吸い込まれていく。

リゼット・ヴァレンタインは、薄暗い車内で冷え切った両手をギュッと握りしめていた。

（ついに、追い出されてしまったわ……）

ヴァレンタイン伯爵家の長女として生まれながら、リゼットの扱いは使用人以下だった。

華やかな妹とは対照的に、地味で口数の少ない彼女は、両親にとって「いないもの」として扱われてきた。唯一の価値は、政略の駒として他家に売り飛ばすことだけ。

その嫁ぎ先が、「冷血公爵」と恐れられるレオンハルト・フォン・クライスだった。

戦場では冷酷無比に敵を屠り、社交界でも一切の感情を見せない氷の貴公子。

彼に逆らった者は一族郎党すべてが破滅に追いやられるという、血生臭い噂が絶えない男だ。

そんな恐ろしい男のもとへ、厄介払いのように押し付けられたのだ。

「公爵様は、私のような女になど見向きもしないでしょうね……」

自嘲気味に呟くりゼットの胸にあるのは、深い諦めと絶望だけだった。

\* \* \*

形式的な結婚式を終え、リゼットは早々に主寝室へと案内された。

豪華な天蓋付きのベッドにポツンと座り、ドレスを握りしめながら彼を待つ。

やがて、静かな足音と共にレオンハルトが寝室に姿を現した。漆黒の髪に、氷のように冷たいアメジストの瞳。

彼はベッドに近づくこともなく、少し離れた場所に立ち止まり、冷え切った声で告げた。

「君を抱くつもりはない。そのベッドは君が一人で使えばいい」

予想していたとはいえ、あまりにも無慈悲な言葉にリゼットの肩がビクッと跳ねる。

だが、彼の言葉はそれだけでは終わらなかった。

レオンハルトは懷から一枚の羊皮紙を取り出し、テーブルの上に無造作に投げ捨てた。

「そして、これは一年後の今日の日付が入った離縁状だ」

「……え？」

「一年だ。一年間だけ、俺の『妻』という飾りでいろ。その後は相応の慰謝料を払って離縁する。実家に戻るなり、修道院に入るなり、好きにしろ」

あまりの急展開に、リゼットは言葉を失った。

彼にとって、自分は一年の期限付きの飾りでしかない。

だが――。

リゼットの胸を満たしたのは、悲しみでも絶望でもなかった。

（抱かれなくていい。一年後には、完全に自由になれる……？）

愛されないことには慣れている。無理に愛されようと努力しなくていいという事実は、自己肯定感の底辺を生きるリゼットにとって、むしろ途方もない『安堵』をもたらしたのだった。

「……承知いたしました。旦那様のお心のままに」

リゼットが深々と頭を下げると、レオンハルトは何も言わずに隣の私室へと消えていった。

\* \* \*

長旅の疲労もあり、すぐに微睡みに落ちていった――はずだった。

「……っ……、あ……！」

深夜。

壁を隔てた隣の部屋から聞こえる、苦悶に満ちた呻き声にリゼットは目を覚ました。

恐る恐るベッドを抜け出し、隣室の扉をそっと開ける。

薄暗い部屋の床に、信じられない光景が広がっていた。

「旦那様！」

あの冷血無比なレオンハルトが、床に這いつくばり、真っ赤な血を吐いて苦しんでいた。

漆黒の髪は汗で額に張り付き、肌には悍ましい黒い痣のようなものが浮かび上がって、脈打つように這い回っている。

「……来るな……！ 出ていけ……っ！」

（毒……？ 違う、これは『呪い』だわ）

リゼットの頭の片隅で、実家で隠し通すよう厳命されていた知識が閃いた。

リゼットは、国でも稀有な『薬師』の力を持っていた。

触れた相手の毒や痛みを和らげ、自身の体液や体温を通じて解毒することができる特異体質。

逃げ出すべきだ。関わるべきではない。

だが、目の前でもがき苦しむ彼を見捨てることなど、リゼットにはできなかった。

「失礼します」

リゼットは床に膝をつき、震えるレオンハルトの身体を抱き寄せた。異常なほどの高熱を発する彼の身体に自身の肌を密着させ、そっと自分の額をすり寄せる。

瞬間、リゼットの体内から冷ややかな魔力が流れ出し、レオンハルトの身体へと注ぎ込まれていっ

た。

彼の熱を自分が引き受け、代わりに癒やしを与える。

「.....あ.....」

レオンハルトの口から、微かな吐息が漏れた。

激しく這い回っていた黒い痣の動きが鈍くなり、硬直していた筋肉がゆっくりと弛緩していく。

甘い、花のようないい匂いがする。

すり寄せられた額から、そして背中を撫でる細い指先から、甘美なほどの安らぎが流れ込んでくる。

「.....リゼット.....」

熱に浮かされた彼の唇が、リゼットの耳元を掠めた。

先ほどまでの冷酷な声とはまるで違う、甘く掠れた男の吐息に、リゼットの胸の奥が妙にざわついた。

\* \* \*

翌朝。

柔らかな朝日の中で、レオンハルトは数年ぶりに「痛みがない」という感覚と共に目を覚ました。

そして、自分の腕の中に、すっぽりと収まる温かい感触があることに気づく。

昨日、離縁状を叩きつけたばかりの、形式上の妻。

彼女の身体からは、心を溶かすような芳香が漂っている。

「.....ん、あ.....」

「あ.....っ、だ、旦那様！？」

自分がレオンハルトに抱きしめられるようにして眠っていたことに気づき、リゼットは弾かれたように飛び起きた。

「お前は何をした。俺の呪いの発作を、どうやって鎮めた？」

リゼットは俯いたまま自身の秘密を告げた。自分が希少な『薬師』の力を持っていること。他者の毒や痛みを引き受け、体温や体液を通じて解毒できること。

きっと彼にも蔑まれるだろう。そう思いギュッと目を瞑ったリゼットに、降ってきたのは予想外の言葉だった。

「.....なるほど」

レオンハルトは口元に微かな笑みを浮かべた。それは冷酷な公爵の顔ではなく、価値ある獲物を見つけた肉食獣のような瞳だった。

「リゼット。あの離縁状の契約に、一つ条件を追加する」

「条件.....ですか？」

「俺の呪いを抑えるため、毎夜、俺の部屋へ来い。『夜の解毒』を命じる。これは妻としての業務だ」  
あくまで「業務」としての命令。

愛のない関係だからこそ、割り切って接することができる。自分のような価値のない女でも、彼の役に立てるのなら、一年間だけ我慢すればいいのだ。

「.....承知いたしました」

深々と頭を下げるリゼットの白いうなじを、レオンハルトは暗く熱を帯びた瞳でじっと見つめていた。

\* \* \*

その日から、リゼットの生活は一変した。

公爵邸の者たちから心からの感謝と尊敬を浴び、初めて得た『居場所』。

だが、平穏は突如として破られた。

「本日はお祝いに、南方で採れた希少な茶葉をお持ちしました。ぜひ、奥様も一緒に」

応接室で、レオンハルトの政敵であるダリス伯爵が薄ら笑いを浮かべてお茶を勧める。

鼻をくすぐる、華やかで甘い香り。

しかし、その香りを嗅いだ瞬間、リゼットの背筋にゾクッと冷たいものが走った。

（この香り.....微かに、甘苦い土の匂いが混ざっている。これは『黒土蜘蛛の毒』だわ。呪いと反発し合い、心臓発作を引き起こす劇薬.....）

レオンハルトが静かにカップへ手を伸ばす。

「お待ちください！！」

リゼットは弾かれたように立ち上がり、レオンハルトがカップに触れる直前、その手を両手で強く握りしめて制止した。

「旦那様、そのお茶を飲んではいけません。毒が.....いえ、旦那様の体質を急激に悪化させる成分が混入しています」

応接室の空気が一瞬で凍りついた。

ダリス伯爵は顔を真っ赤にして激昂するが、レオンハルトの冷酷な命令により、騎士たちに引きずり出されていった。

嵐のような騒ぎが去り、室内にはリゼットとレオンハルトの二人だけが残された。

（.....やってしまった）

事態が収束し、リゼットはサアッと血の気が引くのを感じた。

公爵家の妻として、あまりにも出過ぎた真似をした。

「も、申し訳ございません、旦那様……！ 私、つい……」

震える声で謝罪しようとしたリゼットの言葉は、最後まで紡がれなかった。

ガタンッ！

レオンハルトが乱暴に立ち上がり、リゼットの腕を掴んで強く引き寄せたのだ。

そのまま彼女の背中を壁に押し付け、逃げ場を塞ぐように両腕を突く。

「だ、旦那様……？」

見上げた彼の顔には、先ほどまでの冷徹な公爵の仮面はなかった。

アメジストの瞳が、怒りと、それ以上の何か――どす黒い焦燥感で揺らめいている。

「……お前は、馬鹿か」

「え……っ」

「なぜ、あんな男の前に出た。あの男が逆上して、お前に危害を加えていたらどうするつもりだった！」

怒鳴るような声。だが、その声は微かに震えていた。

彼は、リゼットが出しゃばったことに怒っているのではない。リゼット自身が危険に晒されたことに、激しく動揺しているのだ。

「で、ですが、旦那様があの毒を飲んでしまったら……」

「俺の命などどうでもいい！！」

悲痛なまでの叫びに、リゼットは息を呑んだ。

レオンハルトはギリッと奥歯を噛み締め、大きな手でリゼットの顔を包み込む。

「……お前が傷つくくらいなら、俺が毒を飲んだ方がマシだ。お前は俺の特効薬だ。俺の痛みを消せるのはお前だけなんだ。だから……」

彼が何を言っているのか、リゼットには理解できなかった。

これはただの、一年間の『業務契約』のはずだ。

「……っ、ん……！」

考える隙を与えぬまま、レオンハルトの熱い唇がリゼットの唇を塞いだ。

それは、彼女がここに存在していることを確かめ、二度と手放さないと刻み込むような、狂氣的なまでの深いキスだった。

「ん、あ……っ、だめ、旦那様、息が……っ」

「……はあっ……リゼット……リゼット……」

「俺の目の届かないところへは、絶対に行かせない」

唇の端に銀の糸を引きながら、レオンハルトが低く、呪いのように囁く。その声音には、隠しきれない異常な執着と独占欲が滲んでいた。

社会的な建前も、離縁状の契約も、彼の圧倒的な力の前に瓦解していく。

逃げられない。逃げたくない。

彼の理不尽なまでの過保護と熱情に絡め取られ、リゼットの理性は甘い敗北感と共に、ドロドロに溶かされていくのだった。

\* \* \*

その夜、レオンハルトの呪いはかつてないほど激しく暴走した。

昼間のダリス伯爵の一件——特にリゼットが危険に晒されかけたことが、彼の精神を著しく昂ぶらせた結果だった。

「.....ぐっ、あああっ.....！」

主寝室の豪華なベッドの上で、レオンハルトは身をよじって苦悶の声を漏らしていた。

過去最悪のおぞましい黒い痣が網の目のように浮かび上がり、異常なほどの高熱を発している。

リゼットはネグリジェ姿のまま彼の上に覆い被さり、必死に肌を密着させていた。

しかし、いつもならすぐに引いていくはずの呪いの熱が、今日はリゼットの冷たい魔力を跳ね除けるほどの勢いで燃え盛っている。

（このままじゃ、旦那様の命が.....っ！）

リゼットは恐怖に震えながら、自身の内にある『薬師』の知識を呼び起こした。

体温、体液、粘膜接触。それらを最も深く、最も広範囲で共有し、文字通り互いの内側から魔力を循環させる「究極の解毒法」。

（.....私を、彼に差し出すしかない）

それは、彼と完全に肉体を交えることを意味していた。

恐怖がないと言えは嘘になる。初夜に「抱くつもりはない」と言い放った彼だ。

だが、もがき苦しむ彼を見殺しにすることなど、絶対にできない。

「旦那様.....レオンハルト様.....っ」

リゼットは震える手で、自身のネグリジェの胸元を掴み、一気に引き下げた。

白い双丘が夜の空気に晒される。彼女は涙ぐみながら、熱に浮かされるレオンハルトの耳元で囁いた。

「一番、効果のある方法で.....解毒をします。どうか、私を.....抱いてください」

その言葉が落ちた瞬間だった。

苦悶に歪んでいたレオンハルトの動きが、ぴたりと止まった。

荒い息を吐きながら、彼がゆっくりと目を開ける。

熱に浮かされたアメジストの瞳が、薄暗い部屋の中で、剥き出しになったリゼットの白い肌を捉えた。

「.....っ.....本気で、言っているのか.....？」

掠れた、獣のような低い声。

リゼットが小さく頷くと、次の瞬間、世界が反転した。

「きゃっ.....！」

重い体躯がリゼットの上にのしかかり、彼女の華奢な両手首が頭上でギリッと強く押さえつけられる。

レオンハルトの瞳には、先ほどまでの苦痛よりも、もっと暗く、激しい『飢え』が渦巻いていた。

「お前が言ったんだ.....。もう二度と、逃がさない」

「んっ、あ.....！」

有無を言わさぬ、喰らいつくようなキスが降ってきた。

唇が赤く腫れ上がるほど強く吸われ、舌が口腔の奥の奥まで侵入してくる。

「あっ、ひゃ.....っ、だめ、そんな、強く.....っ」

「.....はあっ.....甘い。お前の匂い.....たまらない.....」

（これは、解毒のための、業務.....）

必死に理性を保とうとするリゼットの建前を、彼の手酷い愛撫がいとも簡単に打ち砕いていく。

五感のすべてがレオンハルトという存在に塗り潰され、彼の巨大で凶暴なまでの熱が、リゼットの未熟で狭い入り口にぴたりと押し当てられた――。

（※続きは製品版でお楽しみください！）